
伏竜天晴222 ～(2)呉との再同盟～

K-hell

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

伏竜天晴222（2）呉との再同盟

【Nコード】

N92870

【作者名】

K-hell

【あらすじ】

かなりパラレルな三国志第二弾。呉との再同盟の使者に推薦された黒星^{クゼ}は、呉の国であった女装娘の陸遜^{モリト}に一目ぼれ、ただしモリトはクゼを交渉の道具程度にしかみてません。登場キャラ 姜維伯約、陸遜伯言、李封忠徳、嚴顔、楊儀威光、張紹星姫、黄月英、諸葛亮孔明、？之伯苗、丁奉承淵、周循、関索維之（張虎）、陳祇奉宗

序>「ど…どういう意味だ？」

と陸遜^{リクソン}、ゴスロリ装いツーサイドアップの男の子は上擦った声でオウム返ししてきました。

「もう一度聞くんが、お前は俺様の事が『好き』なのか？」

どういう意味で、と聞かれても僕自身わかりませんよ。『好き』って言葉に理由があるのでしょいか。リクソンさんはニヒルに笑います。

「ケケ…真っ赤なリンゴほっぺが…子供め」

ぼ、僕は22歳の大人なのに…！ひどい言われ様です…（ぐすん）。でも、彼は可愛いのです。クゼは呉の若い大都督さまに夢中でした。

壱>最近、李封^{リホウ}が口うるさい。僕が数カ月前から蜀軍の陣中へ足を運ぶようになってからです。

今日も僕は、厳顔老將軍に武芸の稽古を受け、滝壺に落とされました。へくしゅっ…！寒いです。晩春とは言え、蜀は山に囲まれた盆地。だから、例年寒いのです。おお、リホウがまた老將軍^{オールド}に食いついてますよ。

「だ・か・らゝ何度もいいですけどね、將軍。もし、この娘に何かあったら国家レベルの危機なんですよ！国難ですっ！！良いんですかつ高血圧で倒れても知りませんよ！！！」

必死に身振り手振り、そして意味不明な例えを交えるリホウ。ああ相手にされてない感じです。じじさまは耳をほじほじ、空を見上げてます。三文コントの終わりはじじさまが「喝っ！！」とリホウを一蹴して終わりになります。

いつも通りタイミングを合わせて両手で耳を塞ぐ僕。対称的にいつも通りリホウは脳震盪を起こして、てんてこ舞いです。

結局、僕はリホウに首根っこを掴まれ、引きずり退場。前にツインテールの髪を引っ張られた時よりマシだったけど、やっぱり窒息しかけました。涙目けほけほ。

リホウは僕に容赦ないです。まあ彼がクゼの保護者ですから。無言の白けている視線が痛いです。

「むうう、僕はもう20歳過ぎてるから、ただの大人じゃんっ！！
過保護の鬼いい！！」

「過保護の鬼で結構だ。クゼ、お前は自分の立場を理解して行動しているか？それとも『未来史を知っている』ってだけじゃ役立たずだってやっとなつていた事は褒めてやるが……」

褒めてやる、の後の沈黙は嵐の前。リホウの眉間が動きます。

「しかしだ！俺（親）の名前を使って、兵部や吏部、尚書に侵入するな！確かにお前はただの人と気付いた。されど『ただの人』だ！オールライ？」

リホウ、熱すぎ。それと僕が初対面るとき散々罵つたのを絶対根に持っているよね。カウンターはご法度な早口だもん。

それに僕が内政や軍事の事に興味を持ってもいいじゃん、少しくらいいいじゃんか。アヒル口ですねる。

「そついうところがまだまだお子様なんだよ。社会に適合しなさい」

デコピンで額をはじかれた。イタイ。僕は若い芽を摘み取るリホウの行為に異議を申し立てます。良い大人が悩める隣人を小馬鹿にするだけで助けない世の中は『友愛』の精神に反します。ダーク発動状態のクゼになります。

「あれえリホウさん、これは保護者による児童虐待（DV）ですか？たかがデコピン一発、されど一発は一発ですよねえ。吏部に訴えるよ（笑）」

もう子供でいいや。反撃開始です。リホウのスーパー土下座タイムは長いんで、僕は審議拒否します。

さようなら」と普段なら逃げるのですが、しかし今日はタイミング悪くお客さんが誰かいらっしゃったようでした。結構真面目で有名な楊儀尚書侍郎が僕らの前に現れました。

リホウは先程までの話の流れから罰の悪い表情でした。けれど、話の矛先は僕のようにでした。僕は一瞬リホウと目を合わせました。楊侍郎は気難しそうな顔で告げました。

「確かにお伝えしましたぞ。本日、申の刻尚書令室へ来るように、尚書令が貴女様に命じております」

仕事人の使いは足早に去っていきました。どうして僕なのでしょう。しかも、あのキャリアウーマン張紹星姫さんが尚書令で証人喚問なのですから。クゼは焦ります。

「…だが、裁判沙汰なら刑部、軍関係なら兵部だ」
みうち

リホウはいつもの虚無的な表情に戻っています。というから裁判じゃないのは確かだけど。

「あの女六部長官は言葉で人を殺せるな。俺も酷いめにあったものだ。残念だがクゼが生き残る確率は限りなくゼロに近い……」

細目でわざとらしくふうつと息を吐くりホウ。僕は泣きそうです。

「ひどっ！励ましてよ、なんか凄く不安だよ」

「とりあえず、星姫様セイキの前でお前が天然ボケを食らわすのは間違いない。失笑されて終わりだから、後は野となり山となる。クゼはやればできる娘だ！」

「そうそう、僕は天然ボケでやればできる娘って、楽観的すぎるよ……」

それでも偽趙雲だったことをリホウが皆に暴露したときよりマシだね。あのときだって、文句言う人はいても丸く収まったし。世の中狭い狭い。クゼは無理やり自分を納得させました。郷に入ったら郷に従うだけです。

式>申の刻、僕は尚書令室にギリギリ間に合いました。だって手続きに凄く時間がかかるなんて誰も教えてくれなかったんですもん。ここはマニュアル通り、ノックしてコンコンっと。

「お入りなさい」

快活そうな女性の声が返ってきました。僕はドキマギしながら碧色の絨毯に足を踏み入れました。デスクの上には認可待ちの書類の山です。あれが租税関係なので、あっちが宣旨かな。

その山の向こうにこの部屋の主人が座っていらっしやいました。やや幼さが残る微笑みを浮かべる貴婦人さまと言いましょか。ポニーアップの半結いの髪型と何処となく幼い感じの服装ですね。

僕が人の事言えないですけど。クゼ天然ボケ発動。

「あもう、僕をお呼びになった張星姫さんですか？」

本人を前に何を言ってしまったんだろう（汗）。クゼの馬鹿あつ！
！セイキさんは口を手で隠して笑っていました。政治家の笑顔は僕には判断し難いです。さらにセイキさんは女性ですし。内で怒っている、表情に曇りがない場合もありますから。

やっぱり謝ろう。セイキさんの視線を感じて、僕の口は噤まれました。妖艶なウインク。

「姜伯約さん、面白い子ね。流石に兵部の帳簿をシュレッターにかけて、一刻ばかりで改定版を作るだけの神童だわ。論点がなかなか良いわ」

そこにつなげますか。僕は困った笑みになります。

というも、間違つて書類を製麺みたいにシュレッターにかけてしまった事件です。リホウに兵部でジャイアントスイングにかけられた上、こっぴどく叱られました。その後、皆で徹夜っていう黒歴史です。

つまり不都合な真実ですね。リホウの言葉が反芻します。『誠実に受け答えしろ』と。

「話が一人歩きしていますよ…僕はシュレッターにかけて、李將軍に叱られただけです」

クスクス。セイキさんは目を細めて笑います。あれ、僕は何か可笑しいこと言いましたか。

「いいえ、全然。普通は帳簿をシュレッターにかけないもの。尚書（うち）がそんな事したら、半年は机の虫になるわ。でも、貴女の行いは兵部の怠け者さん達には良い薬になったでしょうに。構造^けが改革の功名かしら、兵部の無駄遣いと裏金の流れは把握致しました

？（副音声：使えない役人の何人かはクビね）」

まるで僕の失敗が美談ですよ（副音声が恐い）。クゼの笑みは、照れ笑いと苦笑いの半々です。冷や汗はもう結構なので本題を切り出すべきですね。ぴよこんつと拝礼。

「セイキさま、ここに僕をお呼びになったご用件は何なのでしょうか」

「そうね…」

セイキさんは仕事モードな目に戻り、デスクの上の一枚を手に取りました。そして、傍に控えていた楊侍郎からティーカップを受け取り、気を静めるため一口飲み…

「ヴあちいいいいっ！！」

ブ　　つと紅茶が霧吹きです。あわわっ書類が、って侍郎！心配する優先順位がおかしいです。張星姫さんが月間リアクションMPになるのは間違いないでしょう。セイキさん猫舌事件の犯人はヤス…いえいえ外部の人間でした。

舌が痺れた尚書令代理は、どういう訳か黄工部でした。黄月英さんこうげつえい

は、巷で有名な天才女発明家です。切れ目で黒髪が美しい長身のお姉さんって感じです。セイキさんはモゴモゴおっしゃいました。

「たれが好んであんなかに頼む羽目に…尚書（うち）の職員は全員バックアップ中だし…むうねん…」

涙目で活舌が悪いのでセイキさんが可愛い子に見えました。ゲツエイさんはその可愛い子の頭を撫でていましたが、当のセイキさんは何処となく嫌そうな顔をしていました。

セイキさんのキツイ視線にニコニコとゲツエイさんは微笑みながら、僕に辞令が下りました。

「姜伯約、私が尚書令室を訪ねるまで待つこと…諸葛孔明」

うん、また雲行きが怪しくなりましたね。僕の出頭命令は丞相からでした。ここまで推理できても一寸先は闇なのです。パズルはまだ解けません。

丞相がいらっしゃるまで、ゲツエイさんがえっちな話で一人盛り上がっていましたが、僕の記憶は曖昧なのです。えっちなのはよくないとおもいます。

僕の意識は混濁の極みでした。しかし、丞相がいらっしやって場の空気は一転しました。

「歴史みらいが存在するならば、それを破壊すること。すなわち歴史を修正して欲しいのです」

丞相のお言葉は比喻でクゼには難しかったです。でも一概にわかりやすい話だけが世の中にあるわけではないですね。

「…おっしやる意味がわかりません」

丞相はふふつと大人な微笑み。

「貴女が天から与えられた役目（天命）は何だと思えますか？」

クゼは馬鹿なので言葉がなかなか思い浮かびません。額から汗が出ます。

「信じて貰えないかもしれませんが、僕は『未来』がわかります。だから僕がお役に立てると思えません。両親と同じ様に歴史に抗いたくはありません。それに僕は僕の生き方を決めなくてはならないと思っています」

丞相は僕の頭をその大きな手でそつと撫でてくださいました。肯定も否定もありません。そのせいで僕の胸は苦しくなります。

「親の生き方に苦しめられる貴女と同じ境遇の子に逢ってみたいと思いますか」

丞相との会話で僕の真意を見られていました。答えは『可愛い子には旅をさせよ』でした。孫呉への使者。再同盟をかけた蜀の賭けでした。

僕は翌日、丞相から母の形見の装具『竜胆』を頂きました。この大抜擢にリホウは珍しく褒めてくれました。

不安です。蜀建国の功臣の両親と違い、僕は何もしてないのですから。クゼはやればできる子。もう自分を信じるしかありません。僕の使命が何の役に立つのでしょうか。丞相の狙いはこの時のクゼにはわかりませんでした。

参>船の上ではしゃいでいられたのは、ほんの数刻の間でした。

ショートボブの髪型のリホウが僕の護衛の任で一緒にいられるのが

必要以上に嬉しかったりと僕の感情指数はどこか壊れているなと思
った時点で船酔いレベル5でした。どこが雄大な長江ですか…涙と
ひどい吐き気の味がします。

図太いリホウは除いて、船員が次々と船酔いの魔の手に吞まれてい
きます。このままだと交渉以前の問題です。僕はよろよると立ち上
がり、傍にあった筆を長江に投げ捨てました。ここからが演技者ク
ゼです。

「た、大変です！」

具合悪そうに頂垂れていた僕が突然叫んだので周りの役人さんたちは
驚いて僕を見ます。もらった。ダーククゼがニヤリとほくそ笑む。

「丞相から頂いた帝の金印が長江に落ちてしまいました！」

みるみる青ざめる役人たち、何だかクゼは申し訳ない気持ちで一杯
になります。1人空気に動じないKYが登場しました。リホウです。
彼の冷静さは腹立つくらい尊敬しますが、ここは我慢です。

「お前、何騒いでんだ？第一、お前のような下っ端に……」

そこまで言つて、はつとりホウは我に返ります。僕が涙目になっていたのでした。何も言わずに身につけていた装具をリホウに見せま

す。

リホウは深読みしすぎました。丞相からクゼは母親の形見を頂いているんだよな。つまり、クゼには別に密命があるのかもしれない。帝の金印を持つ係とか。リホウは天を見上げ手を額に、やっちまうたぜのポーズ。

深読みが誤認を生み、さらに暴挙になります。リホウは無理を言いました。

「ええい、搜索するぞ！長江の泥水をさらつてでも見つけ出せ！」

船に刻みて剣を求む。この人も融通が利きませんね。さて、僕が投げ捨てた筆の持ち主登場です。

「どなたか、私の筆を知りませんか。あのしっくりくる筆ですよ」

対呉全権大使の？之さんです。^{トウシ}まだ状況が読めないリホウは「それどころでない」と怒鳴ります。呉越同舟になる前にどつきり種明かしをしましょう。

「あのすみません…高そうな筆で遊んでいたら、つい投げちゃいました」

僕はトウシさんの筆を投げたのでした。帝の金印なんて下級の僕が持つてませんよ。リホウはがくりと肩を落しました。

「ええっ！それは私が帝より拝借して保管していますよ。ところで李將軍は何をお探ですか。私の筆を探して頂けると幸いです」

蜀の船員が全員ほっとしました。その後でリホウに陰に連れて行かれ僕は3発ゲンコツを食らいました。この3発で皆さんの緊張が解けたなら本望です。

四>呉都南京、二宮の乱の後に遷都された言わずとも知られた呉の都です。水流網を活かした商人の町です。もうハイカラなものが右を見ても左を見ても一杯で目移りします。蜀の田舎に帰りたくないなあ（かなり失礼）と思ったり、あはは。

「はしゃぐな、子供か！」

僕を親のように注意する武官^{リホウ}さま。もうわかったって！えっ何？こっちに来てって何だよ。するとリホウは僕のツータールを解きました。

「ちょっと何すんの！思うよりも綺麗な2つ結いにするのが面倒なんだから…」

あつと、忘れている人もいるでしょうが。クゼの容姿は黒髪のツータールで黒目、白肌のチビです。もう一人で髪も結える大人です。

僕は自分の髪で遊ばれるのはくすぐったくて勘弁です。だって他人の髪で遊ぶのって子供っぽくないですか。恥ずかしいよ。

無言だけど手先器用なりホウがじたばたするクゼの頭を押さえつけます。

「黙っている。もう少して完成だ、よしOK」

「ええと、えと、鏡、鏡見せてよ！」

理容師さんのように手鏡を僕に向けます。リホウは何故乙女チックな手鏡なんてもっているのでしょうか。それよりこの髪型って。

「ポニーアップだ。別名、関羽スタイル。年相応の女性になるかと思ったら、お前：ぷぷ、元がガキ臭いからより一層お子様だな」

笑うなよ！それなりの服装をすればクゼだって大人っぽくなるでしょう。でも僕の身長じゃ着れないんですよね。ここで頬を膨れさせると更に子供っぽいと馬鹿にされるでしょう。僕はリホウに顔を見られないように他のものへ気を逸らせることにしました。

「あつ、あんなところにお土産屋さん」

無理やりリホウの手を引いて歩きます。何だか余計に子供くさいよ
うな。突っ込まないでね。散々、リホウを引つ張り回したのは彼が
軍人職で体力があるのを知った上での意地悪です。

僕は遊牧民の血を引く蘭西人なのでこれくらいの移動はへっちゃら
なんですよ。それにしても『バクダン』とかいう呉のお菓子は美味
しいです。あの煙の出る機械を作った人は天才ですね。

おい、リホウさん。大の大人が女の子の後ろを就職できないフリ
ーターのように哀愁漂わせて歩くのですか。

水路にかかった橋の前でのことでした。乱れた蹄の音が急接近して
きました。こんな馬の怒声は辺境の戦場でしか聞いたことありませ
ん。

「クゼ、伏せろ!!」

リホウの声を聞いた時には怒った馬の顔と鉢合わせでした。引き殺
される…一歩手前で馬の腹に張り付いたのは遊牧民の本能でした。
腹から反転して、ご婦人の手綱を拝借しました。

「手綱を拝借します!!」

なんとか暴れ馬さんを制御しました。どうどう。いつもクゼはお馬さんの気持ちが分かる子でいたいですね。僕は寸足らずで大きい馬から降りれず、リホウに手を借りました。

「リホウ、有難う。でも怒らないでよ。お姉さんもお怪我はないですか」

リホウが怒るのは、この男が超過保護な僕のお目付け役だからです。お姉さんは肩で息を切らせています。お水飲みますか。僕は中腰になつて水筒を差し出します。

「ありがとうございます…ぐぼぐぼ…」

ワイルドな飲み方をするご婦人ですね。呉の女性は外見がすらつとして長身で美しいのに意外と男勝りなんですね。お姉さんはお淑やかな声でお礼を述べます。

「至れりつくせりで誠に有難うございます。お礼のしょうがありません。私は呉の近臣一族の陸家の伯言はくげんと申します。もし宜しければ

我が家へお越しくださいませんか。私の命を救って頂いたお礼を致したいのです」

むすーとしていたりホウの顔色が変わる。陸家は呉の筆頭株主みたいなものだって。痛い、違うから殴るの。ええっ大都督の御屋敷だって（汗）。ところで大都督ってどんなお役職？またゲンコツなの。痛いよ。

「うふふ。大変仲のよろしい親子ですね。是非、わが主よりもてなしていただくように手配いたしますね」

陸家のお姉さんは口笛で伝書鳩を呼んで、なにやら文をくりつけ飛ばしました。あれ、鳩にしては大きいような。

「鷹よ。わが一族の伝書を司る鳥は鷹なの」

うへえ。何かワイルドで一庶民の僕の想像を超えるなあ。リホウも何やら思い悩んでいるようだ。

「大丈夫ですよ。わが主は親蜀派のお方ですから」

そうなの、そうなら大丈夫かな。僕らはおずおずとお姉さんの案内に従いました。歩いていて気付いたんですけど、呉の水路はここで暮らす人たちの生活と深いかかわりがあるようです。行きかう船、そして水場で洗い物をする人たち。何か呉の国もいいなあとクゼは温かい感じを受けました。

そうこうしている内に巨大な御屋敷の門に僕たちは立っていました。中に通されると蜀の尚書令舎より広いなんとも風流なお庭がありました。あれ、枯山水の砂の色が赤いよ。

「左様でございますね、伯約さま。ところで御仁、この紅砂は赤壁の岩を砕いたものでしょか」

うわ、リホウが僕のことを名前で呼んだよ。何、改まっているのだらう。お姉さんは笑顔で答えました。

「そのように伺っております。紅は炎を表す色。強いてはわが呉国でも勝利の色とされ大変縁起の良いとされます。蜀でも高祖さまの

御旗の色、崇高な色でございましょう。」

お姉さんは侍女さんに呼ばれて退席しました。『しばしお庭でござるりとなさってください』とのこと。そう言われても場違い感がねえ…。するとリホウが両耳たぶを左右に引っ張りました。

「痛いよお、何すんのさ」

怒って食い下がった僕にリホウはいつもの白けた顔で言う。

「おい、お前はクゼかそれとも姜維伯約のどちらなんだ」

何をいまさらと僕は失笑した。リホウは静かに熱くなっているようでした。

「いや、満更でもないぞ。陸遜伯言りくそんはくげん、侮れん奴だ。お前は特に気をつけるよ」

リホウの声のトーンは、最近になって10段階でわかるようになってたのです。今日はめったに聞かない緊急時のトーンでした。僕は戸惑うだけです。

「うん、わかったよ」

「おづのかけら装具と共にあらんことを」

他人の家で戦の前の静けさを漂わせます。僕らは何様なんだろうか。

侍女さんの案内で奥の間に通されました。リホウが侍女さんと国勢やらの大人の会話をしていたので、僕は放置プレーを食らいました。いいもん、クゼは子供でいいもん。

盗み聞きした話では侍女さんの名前は承淵しょうえんさんと言って、若様に断腸の思いで仕えているとか、若様の趣味がド変態で困っているとか、かなり棘のある言い方でした。

誰かの従者ってみんな文句だけ言うのかな。クゼとリホウの関係も

他人事ではないのですから。ちょっと反省。

しばらくただ広い畳の上でじつと座って待っていました。ショウエンさんが襖を両手で開けました。

あれ！？…どういうことですか。リホウは顔面の血管が切れそうなほど渋い顔になりました。そして僕の心はここにあらずでした。

「騙すつもりはなかったのですよ。私が陸家の主、陸遜伯言でございます。どうぞごゆっくりしてくださいね。蜀の御使者の方々」

さっきのお姉さんは煌びやかな着ものを召していました。リクソンさんはニコリと微笑みます。ウヘヘ」

リクソンさんは挨拶もそこそこに行っていました。リホウが悪い夢からもどってきました。

「何がウヘヘ　だ、恥を知れ馬鹿者！」

本日三発目のゲンコツです。とは言え、リクソンさんの御配慮で客間に通されたのですから、ここは甘えましょうよ。僕らはリクソンさんの恩人なので。リホウの頬が引くつきます。腕組みをして4発目を我慢しています。

「ああ、あいつは蜀漢にとっての宿敵リクソンだ。夷陵の敗戦、強いては関羽どのを謀殺した奴だぞ」

リホウは恐い顔をしますが、クゼはゴネます。

「でもでも、蜀は呉と国交を回復させるために使者で来たんでしょ。過去は水に流せないの？」

「無理だ。俺達の都合は国交回復だが、形としては呉帝の即位式を祝うための使者として来たことになっている。もちろん魏からも使者が来ている。くそ、最悪な気分だ」

僕は胡坐あぐらをかいて首を傾げます。

「いぶし銀の関興^{かんこう}さんが使者ならともかく、何で僕らが怒るの？それに呉帝が即位するなら喜ばしいことじゃん」

「お前は！」

リホウが感情をむき出しにします。ここまで激しい怒りを見せるのは珍しいことでした。押し込まれて僕は泣きだしそうです。

ただリホウの顔が恐かったからじゃなくて、リホウは僕の命を心配してくれていたからです。リホウは唇を噛み乱れた呼吸を整えます

「あいつは夷陵で馬超^{ばちょう}殿を罠に嵌めて、矢の雨で射殺した」

馬超は僕の父。僕は父も母も嫌いでした。幼い僕を辺境の地に捨てたからです。それでも親の敵なのです。もう何も返事が出来ません。怒りの前に恐かったのです。クゼはもう、強がりは出来ません。リホウは僕の身体をそっと抱きしめてくれました。涙がしばらく止まりませんでした。ややあって。

「独りで寝れるかな。クゼセキジの母親ならば例え戦場でも寝られただろう」

「むづ、馬鹿にするなよ。僕はもう子供じゃないんだ。22歳だもん」

「そうかい、お休み。また明日な」

しらつと言って襖を閉めた。独りになると両親のいない孤独を感じた。『装具と共にあれ』って、丞相から頂いた『竜胆』とかいうブレスレットのことだよ。重い腕輪リングになんの意味があるんだろう。僕の孤独はこんなもので埋まらないよ。いつの間にかクゼは崩れるように寝てしまいました。

伍>夢で誰かの指が僕の口に近づく。星屑のような形の粒はかじった甘かったです。何だろうこのお菓子。

その時、月明かりに禍々しい鈍色のペンダントが怪しく光りました。闇夜に映る二つの赤い目。殺される――！僕はリクソンさんが同じペンダントを下げていたことを思い出しました。リクソンは僕を殺しに来たのです。

『いいのか、お前はまだ何者にもなっていない。お前の人生はこん

放つ長刀に変わっていました。こんなことが出来るのは恐らく装具だろう。

「フヒヤハハハハ！大したことないな、お前は死刑だ」

柄の方で僕は額をド突かれました。死んだように力がなくなる。僕は死んだのか、いいやゲンコツ3発分の痛みで覚醒しました。

「いったあああい！！」

「うるさあああい！！」

闘魂一発寝起きビンタをリホウが問答無用で浴びせる。あれ、ここは陸家じゃないよ。どこことなく質素で蜀人向けの屋敷。ここは蜀の国だね。

「ちっがーう！！」

リホウは僕を夢から覚ますために庭へ背負い投げました。砂がぼふんと宙を舞います。あれ、赤い砂だ。追撃で頭上から水が落ちてき

ます。リホウは桶を投げ捨てます。

「お前のような阿呆の代表がこの世で息をしているだけ奇跡と思え」

呆れている視線。もしかして、リクソンと闘ったのは夢じゃないってことかな。頭上から水がもう一撃。

「左様に御座います。このくそチビジャリさま」

ショウエンさんの毒舌は寝覚め悪いよ。

「ええ、水浴びはもう宜しいですが、コンペイトー女」

コンペイトーとは僕がリクソンさんの家で貪り食っていた例の砂糖の粒のお菓子です。それと関わりあるか存じませんが、何だか僕の口の中が大変甘ったるいことになってます。

「そりゃそうだろう。陸坊にあれだけコンペイトー口に詰められれば、発狂するもんだ。そのまま奴をぶち殺してくれば、蜀漢のためになったものも……」

泣いたふりをするリホウをなだめるショウエンさんって、この三文芝居はなんですか。もし本当ならリクソンさんにお怪我はなかったのでしょうか。そして僕は蜀の立場を危うくしたんじゃないでしょうか。膝が笑い出しました。

「何だ、寒いのか？早く着がえろよ。陸坊に会いたくないのか」

僕はリホウたちに促されるままに礼服を着ていきます。僕は今更氣付きました。呉帝の即位式か。ショウエンさんは焦って上手く着れない僕を着せ替え人形のように片付けていきます。なるほど流石リクソンさんのお付きの人です。

「お誉めの言葉、有難く存じますが、お手を動かして下さいませ」

リボンで首を絞められました。この人は客人にも容赦ないのね。

式典にはギリギリ間に合いました。ショウエンさんがナビしてくれた呉宮までの最短ルートはかなりダイハードでした。そんな僕の青ざめた顔にトウシさんが「昨晚は大変だったね」と尾ひれがついた方向に励まして下さいました。僕は式典の中でもう一人心ここにあらずの方を発見しました。

「リク様だ。お元気そうだなによりです」

リクソンさんは口から半分魂が出ている感じで椅子に座っていました。可愛い手袋をお召しでした。

「ああ、昨晚の一件で爪が割れたんだよ。俺はネイルが出来なくて恥ずかしい…」

しゅんとするリクソンさん、なんか可愛い仕草です。

「でも、可愛いんです。僕は可愛い男の子がすごい大好きです！」

きよとん。すぐに真っ赤になるリクソンさん。

「くそチビが五月蠅い！昨晚みたいにコンペイトーの刑にするぞ！」

因みにリクソンさんが男だと知ったのは昨日の夜でした。酔っていたリクソンさんの着ものが肌蹴っていたのですから。たぶん、寝ぼけて動揺したんですね。色々と良くない幻を見た気がします。

後でリホウに聞きましたが、昨夜の僕の暴走は陸郎を何者かが夜討ちをかけたことになっていました。僕の父親の血を受け継いでいたので女装趣味があるリクソンさんに何の違和感もなかったのです。

リホウが渋い顔をしていた理由です。それとリクソンさんってあの頃はまだ呼んでいたんですね。

六>本日も蜀の飯屋にリクソンさんがいらっしやいました。蜀の枯れ木が見たくなったのさ、とおっしゃいますが実際は政務から逃げて来たんでしょう。

僕は胡散臭い視線を向けながら、今日で3日目ですねと内心思ったのでした。

「ちびクゼにはわびさびがわからないんだな。お子様はこの魂の叫びが全くわからないようだ」

「美しく僕を侮辱しても無駄ですよ。どうせ歯が痛いんですよ」

こんな頬が腫れあがった顔で政務に出たら嘲笑の嵐だとか思っているんでしょう。コンペイトーばかり食べるからですよ。

猫のように餌づけられる僕も他人事じゃないです。お菓子は食べ過ぎると太っちゃいますもん。デブクゼ。

そう罵りながら、ちゃっかり座り込むリクソンさんは蜀の陣も自分の家状態です。いえいえ、ここは呉の国でした。

「政務は影武者でも問題ない…が、それより蜀との交渉が難航してな」

目が青い伝書鳩がリクソンさんに書を送ってきました。目が青い鳩は呉国主さまの鳩らしいです。それにしても紙の文って蜀であまりみないなあ。蜀では竹文が主流です。これが経済格差か。

リクソンさんは紙を破り捨てました。貧乏性のクゼには考えられない発想です。どうやら僕に熱い視線があるのは、リクソンさんがクゼを呉の内部事情を聞きだそうとする間者だと思っっているようです。そんな忍びの仕事ができるのは亡き父だけです。3日目であろうや、疑いが晴れかけています。

「ん…お前はなんで呉下りまで来たんだ？」

そう来ますか。頭のいい人と会話するのは答えを予め用意しなければいけないので気疲れします。

「もちろん生のリク様に会いに来たんですよ。好きですもん」

コンペイトーをかじります。ゴスロリ調の可愛いお召し物のリクソ

ンさんは今日も可愛いです。リクソンさんは上擦った声で言います。

「別に嬉しくないんだから！それにどいう意味だよ。もう一度聞くがお前は俺のことがどこまで好きなんだ？」

リクソンさんが真っ赤に茹であがりました。うへへへ可愛い顔。クゼはわざと話を変えます。

「リク様の装具はペンダントなんですね？装具って使用者によって形が変わるものですか」

魚を逃したといった残念そうな顔を見せます。リクソンさんはニヒルに戻りました。

「使う人間によってちげーぜ。武具だから武人が使うことが多い。その関係上ブレスレットタイプがありがちだが、使用者の心を反映するらしい。一説のよると装具は、かつて皇族のみが持つことができた玉璽のかけらを元に作られているらしい。形質変化する武具なんて魔力があると考えるのが普通だろう。ところでお前はクロスチヨーカーに治まったのか」

クゼの装具は前使用者のブレスレットから異教徒のクロスチヨーカーに治まっていました。リクソンさんはこれを可愛いとおっしゃい

ましたが。クゼは異教徒のものに可愛さを感じません。人それぞれなのでしょう。

リクソンさんがゴスロリ趣味なのがいい例ですよ。ところでゴスロリって精神性ですよ。リクソンさんは心が病んでいるのですか。

「ああ、国事を任せられているからな。俺は一人称は『私』にしないかならないし、言葉づかいですら気をつけないといけない。唯一の自由が服装ってことだ」

肩で溜息をなさいます。対して僕は目を輝かせます。

「スゴイですね！呉の影の支配者ですか。政治献金には気を付けて下さいね」

「誰じゃそら。お前の発想力には脱帽以上に失望する。チビクゼ」

うーんと、『黒星^{クゼ}』は僕の本名じゃないですよ。あだ名、通り名とあったところです。ところでリクソンさんにも呼び名はあるんですか。

「異端^{モリト}の守人だ」

コンペイトーで僕の頬を突きました。サクリ。モリトは何だかんだで僕と同じ年らしいです。いつも小馬鹿にされます。身長のせいですか。モリトの馬鹿。後にわかったのですが、モリトは双子の兄らしいです。それは後談。

七>長雨の火が続くようになりました。その頃になると蜀の飯屋にも人がまばらになっていました。リホウたちも湖南省まで引き上げていたので、交渉を続けるトウシさんと下働きの僕くらいがこの屋敷に残っていました。

頬の腫れがひいたモリトも政務が忙しくなってきたらしく久しく会っていませんでした。夜討ちの一件で僕は呉の土地に軟禁されました。ぶつちゃけ暇です。屋敷にいても掃除くらいしか仕事がありません。

「暇だよお…蜀に帰りたい」

かっつと閃光が横殴りの雨粒に反射します。ややあつて大きな音。雷は人類に火を使うきっかけを与えてくれたんで僕は畏敬するだけです。

どーん。ひっ嘘です。ごめんなさい。やっぱりクゼは雷様が苦手です。僕がネズミのように震えているところに近づく人影があります。

した。ごくり、とクゼは唾を飲み込みます。

「どちら様ですか。トウシ様はまだお帰りでありませんよ」

雨粒を空切る刃の音で目が覚めました。反射的に身体を反転し避けます。

「僕の装具を解放するべきか…いや、失敗は許されない。まず落착こつ着こつ」

敵が何人かわからない中で制御不能な装具を使うのは危険です。僕は物陰に身を隠し様子を窺うことになりました。がたんがたんと物が崩れる音がします。呉には水賊が現れると聞きます。連中は水賊でしょうか。

「いや、ちげーよ」

背後を取られて僕は動転しました。開きかけた口を見覚えのある細く長い綺麗な指が塞ぎます。モリトだ。僕の瞳孔は大きさを元に戻しました。静かにと指を唇にあてるポーズ。

「こいつらは魏の下っ端だろうに。ついさっき呉は蜀と国交を回復した。その腹いせってところか。面倒だ。クゼ手伝え、蹴散らすぞ」

そう言つてモリトは奴らと戦闘を開始しました。涼しい顔で家を破壊しつつ、奴らを吹き飛ばしていきます。刃先のないトンファーみたいな双戟でした。殺す気が全くないのが装具に反映されているのでしょう。

僕も装具に念じます。刃先のない槍で応戦です。掴みにかかつてくる人間の力を利用して投げ飛ばし、棒きれでみね討ちに突き飛ばします。

四半刻もしないうちに水賊もどきたちは足をひきずって闇の中へ四散していきました。僕は安心しきって、装具をチャーカーに戻してしまいました。

「ふう、モリトありがとう」

何の冗談でしょうか。モリトは僕の喉元に刃先のある長刀を向けます。

「クゼ、落ち着いて装具を外し、床へ置いてもらおうか」

本当の敵は身内にありでした。クゼは目を伏せ、モリトに従い装具を外しました。国交回復の足枷はどうやら僕のようにでした。丞相す

みません。

クゼは両手足を縛られ、口と目を布で覆われていました。モリトは僕をすぐに始末するような真似はしませんでした。それにここは遠く異国の地。僕に逃げ場はないのです。モリトの私兵が僕に行動を起こさせないように、槍先を向けている殺気が常にありました。

河を渡り、馬で何里も走ったようです。僕はどこへ連れて行かれたのでしょうか。そして今、僕は陣屋の柱に手足を結ばれています。布が外され、目と口は開けるようですが、恐くてできません。

「クゼちゃん、目を開きなさい」

モリトのような女性の声が聞こえます。僕は首を横に振りしました。

「おい、チビクゼ。俺様が目を開けて命令しているんだよ」

モリトの指が強引にクゼの両目を開けました。痛いって。あれ…モリトが2人。一人は僕の知っているゴスロリ調の服装のツンツとした感じのモリト。もう一人はクゼの知らない忍びっぽい軽装で微笑む女性でした。モリトは企み笑みをニヤリと見せます。

「さて作戦開始だ」

ここはどうやら蜀でも呉でもない魏国のようです。クゼには嬉しくない懐かしい空気です。

呉での暴動はクゼに責任があり、クゼは魏のスパイとして手足を縛られたまま、囚人が入れられる鉄格子の子になっていました。この辻褄合わせにクゼの命は瀬戸際でした。

衛兵に蹴り飛ばされ、クゼは合肥城主様の前に無様な形で放り込まれました。モリトは僕に配慮することなく、仕事を切り出しました。

「我が呉国が良ければそれで良いのです。しかし一害あって利益なしでは呉候様の御顔が立ちません。私の言っていることは御理解頂けますか」

営業スマイル。その優顔に大の男が唸り続けるのが関の山だった。すかさず追撃のモリト。

「さようでございますか。魏国の判断が漢王朝の判断と受け取りますよ。御手が煩わしいのであれば…この私が！！」

モリトがクゼの喉元に装具の剣を当てます。城主様は進退が極まっています。額から汗が噴き出ます。

「ま…待ちいや！呉候さんの要望は何や！」

装具解除。外交は王手です。一瞬モリトは笑みを浮かべました。クゼは自分の無実を哀願します。こんなんで城主様を落とせるのでしょうか。

「死にたくない！私は無実です！呉は蜀の使者である私を魏に売ったのです！」

城主様の目の色が変わります。ギリギリの決断が折れたようでした。

「ああ、そうなんや。ちょい待ちい、呉の陸さんよ。あんさんら、また俺らに厄介を押し付ける気か」

モリトが殺気を消して笑う。扇子がぱつと開き口元を隠す。

「また、とはですか。いいえ今回は今回ですよ。関羽の首に比べたら、貴方様にとって容易いものでしょう。何ならこの城を明け渡してもらい、手打ちにしましょうか。いずれにせよ、我が国での騒動は漢王朝に御裁可を頂かなければなりません。漢王朝の臣である貴

方様であれば、このような事は些事だとお見受け致しますが」

僕の命とこの城を天秤にかけるのが、どうやらモリトの狙いらしいです。しかし前例が重いためにクゼの命を断てないようです。苦し紛れに城主様は言いました。

「俺の範ちゅうを越えとる問題や。朝廷の御裁可をすぐに仰ぐ。勘忍してくれ」

クゼの命は何とか助かりました。モリトに引つ張られ外の陣屋まで戻りました。これで何が変わったのでしょうか。

「御苦労さま。クスクス、お兄様も人が悪いですね。あの城主が関羽の子供と知って、蜀のクゼちゃんを差し出しますか」

「ちげーよ。筋の通らない話をして、あいつを揺さぶって見ただけだ。俺はあの城主とクゼの関係を知っているから出来たわけさ」

モリトは自画自賛しているようでした。縄を解かれても僕はモリトの言っていることが全く理解出来ませんでした。これだからお子様は、とモリトは両手の平を広げました。

「おい、我が妹にして我が影よ。この馬鹿クゼに7歳児でもわかる

ように説明してやれ」

妹さんは首をかくりと下に落としました。めんどくせえ、と言うモリトに動きが似てました。にこにこ笑い続けているので何かモリトより怖い感じがします。

「はじめましてかな、クゼちゃん。私はモリトの妹で周循シュウジュンと言います。普段は兄の陰日向で行動しています。本来の私は病弱つこな設定なので、表舞台にはでません」

作戦の意図と関係ないよね。クゼの頭に『？』がまたつきました。モリトは鼻で笑い飛ばしました。

「誰がてめえの自己紹介しろって言った？仮面かぶせて病原菌ばら撒く女に戻すぞ」

つまり、ジュンさんはモリトがやりたくない仕事をやっているのかな。この前、歯が痛くて政務をさぼったときか。それと蜀の陣が魏の刺客に襲われたとき、モリトがいち早く駆けつけた理由とか。あと僕は常に見られている感じがしたもの。なるほど、なるほど。僕は手のひらをポンと叩きました。

「ん…どうやら今回の俺様の素晴らしい作戦にようやく気付いたか」

モリトは僕の様子に勘違いしたようです。

「おいジュン。このチビを湖南までマツハで送ってやれ。くれぐれも蜀の方々に無礼のないようにな。それと、チビクゼ…この合肥に來た経緯は蜀の連中に言うなよな。もしばらしたらためえの穴という穴に突っ込むからな！」

何を突っ込むのかとは恐くて聞けません。モリトはニヒルに笑いしました。

「魏と戦をするきっかけになるぜ。けけけ、合肥城主は離間の刑さ」ジュンさんに眠り薬を口に当てられたクゼは気がつくとも船の上でした。あれ何でこんなに早く船の上なのでしょううか。

「それはオレがこの馬を合肥からばくってきたからだ」

モリトのゴスロリ装をしたジュンさんでした。モリトが揺れる船の上で馬に乗れるはずがありません。真つ赤な馬ですね、どなたの馬ですか。ジュンさんは蘭西人顔負けで器用に馬を操り下馬しました。

「うふふ、お兄様に似てたかしら。クゼちゃん、この馬は『赤兎^{セキト}』」

「といって関羽様が死ぬまで愛した名馬です。お兄様がクゼちゃんにこの馬の主人になって欲しいとの伝言を承っています」

船頭さんが船を進める音だけになりました。クゼは頭が真っ白です。蘭西人に馬をプレゼントするのは求婚の意味があるんです。リセット。でも関羽將軍の息子さんの合肥城主様はどうなるんですか。僕と関わりある人らしいので心配です。

「ええクゼちゃんが合肥城主の張虎さまを心配なさるのは当然ですよ。彼は貴女のご親戚ですから。詳しく申し上げますと貴女のお母様のお姉様の御息です。三親等ですね」

何かモリトに僕の血縁まで握られている感じはあまり気分がよくないですね。クゼには長江が揺れているように思いましたが、実際はクゼの身体が揺れていました。色々あり過ぎてショート寸前です。モリトになりきったジュンさんに湖南省公安まで送って頂きました。

ハ>僕は久々に蜀の面々と再会したのです。やっぱりリホウには怒られました。というか泣かれました。義理の親でも心配してくれたのです。クゼは反省しました。

僕はそんな訳でリホウたちと顔を合わせ辛くて、1人で湖面近くの丘に座って考え事をしていたのです。

「僕は戦えるのかな…戦争はもう嫌だよ…父上」

僕の心中は穏やかではありませんでした。僕は呉の大都督の陸遜伯言に恋をしていました。

でも彼は夷陵の戦いで多くの蜀の兵士を殺しました。そして何より父上である馬超バチョウモウキ孟起の敵です。戦争になったら僕はモリトに対する思いが変わってしまうかもしれません。

それに蘭西の辺境で異民族同士の戦いは経験してきました。人の死に鈍感になってしまうのが恐いんです。クゼは気付いていました。自分は装具を持った時にモリトを殺そうと血が沸騰するほど興奮していたのです。装具を持ち続ける限り、僕は人を傷つける。

「あれ、首にチョーカーがない。モリトに取られたままだった」

クゼの口から零れた笑い声は薄い平淡なものでした。これでいい。僕は文官として生きる。同時に蘭西人として戦う本能を捨てる寂しさを感じました。

「クゼはあんまり変わらないね。また誰かにいじめられたのかい」

その声に思わず顔を上げました。クゼは涙を拭くのも忘れて、懐かしさと戸惑いの中にいました。

「陳祗チンギ？なんで奉宗ホウソウが湖南にいるの？」

ホウソウはクゼが蜀にきて間のない頃からの親友です。優しい反面、良くも悪くも目立たない中肉中背の男性なので『影が薄い』と揶揄やゆされる彼ですが、泣き虫のクゼはよく彼に慰められたのでした。

「今日はクゼを慰めにきたんじゃないんだ、ごめん。丞相の使いだよ」

申し訳なさそうに彼は言います。ホウソウは丞相の達筆すぎる文を僕に手渡してくれました。まさか帰りが遅いから左遷とかじゃないよね。最初は僕が魏国へ寄り道したのを見透かしたかのような内容でした。簡単にいうと陸遜と仲良くなりましたか、と書かれていました。次からが本題。

雲南遠征。呉との同盟が復活した今、蜀に東の憂いはなくなりました。つまり魏に臣下の礼をとる南蛮夷を平定するため、戦いが始まるうとしていたのでした

「嫌だ！！」

僕は始めて丞相の命令に反抗しました。僕は戦争に従軍しなければなりません。でも人の命を奪うクゼはクゼでなくなるのです。

ホウソウは僕に何も言いませんでした。湖面は戦の前で波一つ立ちません。これが戦の前の静けさでしょう。ただ一人揺れ動く僕は未来を信じられなくなりました。

To be co

ntinue GARYOTENSEI222(3)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9287o/>

伏竜天晴222～(2)呉との再同盟～

2010年11月16日18時35分発行